

講演

「今後の金銭教育の進め方」

教育学博士・前大妻女子大学教授 金井 肇

1. 金融にかかわる環境の変化への対応

我々を取巻く金融環境が大きく変わってきておりますが、この変化の意味をよく理解することが大切であるというところから、話を始めさせていただきたいと思います。

皆様よくご存知のように日本版金融ビッグバンと呼ばれる金融面の大幅な規制緩和が進展しています。金融ビッグバンがスタートした頃には、世間一般の捉え方は、「いろいろな金融商品が選べようになる」とか、「自己責任が重くなる」という程度のもので、そのインパクトの大きさについては「よく分からない」ということであつたと思います。しかしビッグバンの進行に伴って、「これは私たちの経済生活を根本から変える極めて大きなものである」ことが明らかになってきました。

これまでの日本の歴史を振り返ってみても大きな経済の構造変化がありました。すなわち、米を中心とした物々交換の時代から貨幣経済へ転換したことです。貨幣経済に切替わった時に、意識の切替えが遅かった武士階級の人々は、貨幣経済に乗りきれなくて経済的に大変損をしました。逆に貨幣経済への転換とともにすぐに意識を切替えた町人は富を築き、武士に代わって世の中を動かす力をもつようになりました。そして、次第に国民の生活スタイル全体が変わってきたわけです。

この変化には大変長い時間が必要でありましたが、着実に進行しました。今でも、山間部の一部地域では、法事などがありますとお金ではなく米を届けるという習慣が残っていると聞きますが、そうした地域でも勿論、貨幣経済は着実に浸透しています。否応無くお金がなくては生活できないようになっていきます。それと同様のことが、この金融ビッグバンでも起こりつつあるように私は思います。

金銭教育についても、金融ビッグバンがもたらす結果をできるだけ早く予想しながら、どのようにして新しい金融システムの中で位置付けていくか、という面から考えなければいけなくなってきたように思います。金融審議会で「金融に関する消費者教育を進めていくことが重要である」と改めて触れているのも、こうした意識が根底にあるからであろうと思います。ですから、金融ビッグバンについて、「いろいろな商品

が登場します」、「消費者の保護制度にはこういうものがあります」、「自己責任を果たさねばなりません」などの事柄は勿論大事ですが、それ以前の根底の部分から考えていかなければならないと思うのです。「これは大変だぞ、うっかりしていると取り残されるぞ」と思うぐらい本気で考えることが重要であると感じています。

したがって、今まで私たちが経験してきた経済生活をもとにして、小幅な修正を図っていけばよい、個人にとって金融といえば預貯金だけであったので、その習慣を少し変えればよいという程度のことでは済まないことを肝に銘じるべきです。例えば、1000万円を越える預金は、仮に銀行が破綻しペイオフが発動された場合には、全額保護されないかも知れません。いくつかの銀行に預金を分散させるなどその対策も考えなければなりません。あるいは、預金の名義を分散させた場合に税金はどうなるのかなど、預金一つをとっても色々なことを考えなければならなくなりました。

2. 金銭教育の進め方の再検討と社会の啓発

さて、このような変化の下で、私たちはこれからはどのようにしたらよいのでしょうか。大人の意識を変えていくことは勿論大事です。ただし、さきほど米の例を引用しましたが、金融ビッグバンの進行は、貨幣経済への移行よりはるかにスピードが速いものです。意識の変化にあまり長い時間をかけるわけにはまいりません。また、それと同時に、未成年者に対する金銭教育のこれからの踏み込みについても真剣に考えなくてはならないと思います。

特に学校における金銭教育の今後の進め方を考えることは極めて重要だと思います。学校教育の内容は学習指導要領に規定されておりますので、各学校では学習指導要領に盛り込まれている内容を全部やっていかなければいけないのですが、先生方のやる気があるかどうかによって教育効果というのは非常に違ってきます。算数や国語に手を抜く先生はいません、これは一生懸命に教育してくださいます。ところがそのほかの科目は先生方のやる気によって左右される傾向があります。世の中の雰囲気などが影響し、先生方の取組みや踏み込みに濃淡が出てしまうのです。例えば一番影響されやすいのが道徳教育です。道徳教育について一生懸命にやる先生もいらっしゃる一方で、そうでもない先生もいます。道徳教育なんてどうせ効果はないだろうという雰囲気が強いとそれが学校に影響します。それと同じようなことが金銭教育についても当てはまります。世の中が「金銭教育はとても大切である」という雰囲気にならないと

効果が上がらないのです。「やらなければいけないことだからやりましょう」というだけでは教育効果は上がりません。本当に大事だと思って、先生方が心を合わせるようになると教育効果が向上します。金銭教育のお金を大事にする、ものを大事にする、自分の生活を健全にする、そのようなことについて、子どもに「本当に大事だな」と心から分からせることが重要です。ここが算数などと決定的に異なる点です。算数は、子どもに受け入れる気がなくとも、 $1 + 1 = 2$ であることを自然に覚えてしまえばそれで終わりです。言い替えれば、 $1 + 1 = 2$ ということが知的に理解できてしまうと否応無しにその子の実力になってしまいます。ところがお金が大事だとか、ものが大事だとか、自分の生活設計をしっかりとやっていこうとかということについては、知的に理解すべき事柄ではなく、心で受け入れる事柄であるということです。

3. 学校への働きかけ

皆様方のお立場ですと学校に対する働きかけも多分大事なことになると思います。その場合にはやはり校長先生の理解が大切です。もし校長先生の理解が得られないようであれば、市や町の教育委員会の教育長に働きかけてみることです。教育長が理解してくれると学校への影響力は大きいと思います。その際、金銭教育がどんな役割を果たすのか、その位置付けをはっきり理解してもらうことが必要だと思います。位置付けというのはこういう意味です。学校には図書館教育であるとか、給食教育であるとか、いろいろな教育課題が持ちこまれています。そのため、金銭教育の話を持ち込むと、「この上さらに教育課題が増えてはかなわない。とてもできない」となってしまいがちです。しかし、これは誤解です。金銭教育は他の教育課題と並列される課題ではありません。金銭教育は子どもたちが生きていく土台、社会が成り立っていく土台を教えるものであり、学校教育の一番中心の土台になるのだという位置付けを理解してもらうことが肝要なのであります。ただそうは言っても、皆様方のお立場は実は難しいと思います。校長や先生に説教するわけにはいきません。事例を紹介するのが効果的だと思います。子どもたちが非常に生き生きとしている学校例を示すことで、先生方の自尊心を傷つけない形で働き掛けを行うことが可能となります。

4. 「総合的な学習の時間」の活用

ところで、我々は総合的な学習の時間に金銭教育をできるだけ導入してもらおうと

努力を続けておりますが、学校で現在行われている総合的な学習の時間は、もしかするとただの体験活動に終わっている例が多いのではないかと危惧しております。なんでもいいから子どもに活動させればいいたろうというようにやっている場合がある。なぜそのようなことが起るかと言えば、総合的な学習の時間の活動事例として、自然体験やボランティア活動、グループ学習や異年齢集団活動などが挙げられているため、表面的な捉え方をして、グループ活動で体験活動させればよいというように思っているからです。そこで、皆様方のお立場としては、体験活動をするにしても、子どもをしっかりした人間に育てるという金銭教育の視点が大事ではないかということを経験して働き掛けを行っていただきたいと思います。その際、『学校における金銭教育の進め方』をぜひご活用いただきたい。学校にアドバイスする際の具体的なヒントが随所に盛り込まれています。総合的な学習の時間こそ学校で金銭教育を行うのに最も相応しい時間ではありますが、実は金銭教育の内容は各教科に散りばめられています。そうしたことも含めて学校への働き掛けを行っていただきたいと思います。

5. 家庭・地域社会における金銭教育の進め方

次に家庭・地域社会における金銭教育の進め方ということに焦点を当ててみますと、現段階では学校から家庭に働きかけてもらって学校教育に協力してもらうということが多いようです。これは金銭教育に限らず、例えば挨拶運動をしましょうということでも然りです。子どもはある意味では素直ですから、地域の人々に「おはようございます」などと挨拶をします。最初は大人のほうが照れてしまいスムーズに挨拶を返せませんが、そのうちに自然に大人も挨拶を返すようになります。このように時間をかけてねばり強く取り組むことが大事です。

(1) もの、金銭にかかわるしつけの大切さ

では、家庭ではどのようなことをしたらよいでしょう。これには、やはり『学校における金銭教育の進め方』を参考にされたらよいと思います。ここでは家庭でなすこととは何か書かれています。その幾つかを紹介をしますと、まず家庭でなすべきことはしつけであると書いてあります。家庭のしつけ、当たり前のようなのですが、しつけなどはいやだというお母さんもいます。例えばあるお母さんはこう言います、「子どもが小学校に入ってしまうと学校の校則に縛られる。卒業して社会に出ると社会の決りに

縛られる。だから、何にも縛られない今のうちくらいは自由にさてやりたい。しかし、これはしつけの意味を取り違えているということです。しつけは、行いを型にはめることではありません。鏡もちをイメージしてみてください。下の餅は、人間が生まれた時から持ち合わせている感覚に左右されやすい感情です。一方、上の餅は善悪を判断するなど価値を大事にする心ととらえてください。しつけもせずに放っておきますと、下の餅だけがどんどん大きくなっていきます。ただ欲のままに行動をする動物的な人間に育ってしまい問題行動を起こすようになってしまいます。しつけとは、放っておいてもどんどん大きくなる下の餅に負けないように、上の餅を膨らませる努力のことを言うのです。

具体的なしつけの例をお示ししましょう。熊本県のあるおじいちゃんから聞いた話です。お孫さんがいるのですが、お孫さんは小学校の一年生です。そのおじいちゃんの家は町から10キロくらい離れた山村にあり、お孫さんと一緒に暮らしています。おじいちゃんに町に行く用事ができました。お孫さんは「僕も連れて行って」とせがんで町と一緒にきました。おじいちゃんの手事が済んで帰るときになって、「おじいちゃん、こっちの道をまわって帰ろうよ」。その道筋に大きなおもちゃ屋さんがあります。お孫さんには明らかに意図があります。そのおもちゃ屋さんの前を通りかかった時、お孫さんは、「ちょっと寄ってみようよ。見るだけいいから」。見るだけという約束で店に入りました。中には、お孫さんが最初から目当てにしている立派な飛行機のおもちゃがあります。「あれいいね、おじいちゃん。ちょっと手に取ってみようよ」。手にとって見る。しばらく見ているうちに、「僕、これ欲しくなっちゃった、おじいちゃん、これ買って」と言い出しました。おじいちゃんは、「こんな高いものをお父さんやお母さんに黙って買うことはできないよ」と言ってもお孫さんは言うことを聞きません。そのうち、「そんなわからないことを言うと置いて行っちゃうぞ」と言って、ついに本当にお店に置いて帰りました。勿論そのままでは済みませんから、家に帰ってその子のお母さんに「これこれこういうわけで置いてきた、お前さん迎えに行ってくれないか」と頼みました。お母さんが迎えに行くと、向うからトボトボとわが子が歩いてくる。どうしたのかわけを聞くと、その子は「おじいちゃんは僕をかわいがっているから、とことんだだをこねたら買ってくれると思ったけどだめだった」と言ったそうです。一年生でも、作戦を立てることをちゃんと分かっているのです。かわいい孫の言うことを聞いてしまうのは簡単なことですが、ここでその誘惑にじっと耐え、上の餅

を膨らませることが肝要です。一方、悪い例もひとつ挙げておきます。新聞の投書に書いてあったのですが、あるお母さんがスーパーに幼いお子さんを連れて行った。3歳くらいのお子さんです。チョコレートの棚のところでそのお子さんがだだをこねたので、棚からチョコレートを取ってわが子の口にポンと入れてやった。その後、そのお母さんは包み紙を持って行ってレジで精算したそうです。別に罪に問われる話ではありませんが、その場ですぐに欲しい物を与えてしまうことが問題なのです。少なくとも、「お金を払ってからでないためです」と言って我慢させることは必要でしょう。わがままいっぱいになってしまえば、小学校中学年くらいになってから「お金やものを大切にしましょう」などと言ってももうだめです。しつけというと、人間を型にはめることというような印象をもっている親もいますが、そうではないのです。また、しつけに関係する事柄は、ものやお金の使い方に関することがほとんどであることに留意する必要があります。

(2) こづかいの与え方

しつけのことはこの程度にし、家庭で行うことの2つ目の事柄として、おこづかいの与え方について考えてみたいと思います。これも事例を挙げます。10年ほど前、全国金銭教育協議会にみえたある県の婦人団体の会長さんが発言されました。内容は、東京に出張する際に、小学校入学前のお孫さんに必ず多額のおこづかいを与えてしまうというのです。「金銭教育のことを真剣に考えていて、それはいけないことだとわかっているがどうしようもない。孫に嫌われたくない一心でついお金を与えている。どうしたらいいでしょう」というものです。勇気のある発言だと思いましたし、とても大事なことをおっしゃったと思います。さてどのようにしたらよいでしょう。「やらない方がよい」と言うのは簡単です。でも、やらない方がよいことはわかっている、やらないではいられないという悩みですから、「やらないようにしてください」と言っても効き目はありません。幼い子どものことですから、急におこづかいを与えなくなれば、「おばあちゃんは僕を嫌いになったんだ」と思うでしょう。何も言うことを聞いてくれなくなります。子どもは、自分をかわいがっている人の言うことしか聞きません。子どもだけではありません、大人も大体そうではないでしょうか。自分に好意をもっている人の話であれば耳を傾けたくなくなります。さて、この子の場合、おこづかいを与え続けなくてはならないでしょう。ただし、与え方を工夫する必要はあるでしょう。

私は助言者の立場から、「ただ黙って与え放しにするのではなく、お金の生きた使い方を考えるように言ったらどうでしょう。例えば、このお金を地震とか災害があったときに寄附として使うとか、自分を立派にするために使う、あるいは将来に備えて貯金をしておくなどのアドバイスを与えてから渡したらどうでしょうか」と申し上げました。このような言葉を添えて渡すと、「お金の使い方を考えることは大事なことなのだ」という意識を育てていくことになると思います。それぞれの家庭でおこづかいの与え方はいろいろあると思いますが、基本は子どものときから自分で我慢すべきものは我慢して本当に欲しいものに使うように考えさせることですから、そのことさえ忘れなければ方法は様々でよいと思います。

(3) 手伝いの大切さ

次に「手伝い」について考えてみたいと思います。手伝いについても「何もさせないで、学校のことのみをやらせておけばいい」と思っている親御さんも多いようですが、実はそうではありません。これも事例に即してお話しします。十数年前に小学校6年生が書いた作文です。どれほど手伝いをさせることが大事かを伝える作品なのでご紹介します。

「毎月18日がすぎると決ってお母さんは私に1500円をくれます。これは全部私の貯金になります。金曜日の学校の貯金日に持って行きます。毎月毎月貯まていくのを見ながらこのお金をうまく使って周りの人に喜ばれるようになりたいと思っています。私はこのお金がどうやってお母さんの手に入るかよく知っているからです。以前、私はおやつを買うときはお母さんのお金を使っていました。自分の小遣いは使うのがもったいないし、おやつなら100円は使ってもいいという約束ができていたからです。ほとんどの日、あたり前のように100円を使っていました。そんなとき、お母さんが内職を始めました。形の違った7、8個の部品を組み合わせる一つの製品にする仕事です。大きいもので4センチメートル、小さいものは1センチメートルしかないプラスチックの部品で、カッターで削らなければならないものもあります。それは細かくて根気のいる仕事です。ときには2日間で1000個も仕上げなければならないのです。朝から夜まで一生懸命やっても追いつかないのです。私と弟も手伝うことがあります。手が真っ黒になってやっとならなくなります。5個目にはもういやになってしまいます。おやつ買ってきてもいい?と聞くとお母さんは100個つくったらね、それで100円よ

と言いました。えー1個1円？。私はびっくりしました。でも10個もできないのにお母さんは、さあおやつを買ってらっしゃいと100円玉を出してくれました。私はお母さんの優しさを思いました。なんでもないように使っていた100円玉がこんな大変な価値をもっていたなんて。でも、私はやはりお菓子を買いに行きました。そしてゆっくり食べました。お父さんが休みの日、家族そろって内職をしました。お父さん、こんな大変なことをしてやっと組み立てた1個が1円なんてあんまり安すぎるよねと言うと、お父さんは、お金を貯めるということは大変なことなんだよ、大人は誰だつてとても苦労をしているんだ、と言っていました。親子で仕事をするのはちょっと楽しいものです。みんな優しい気持ちになるようです。たった1円だけれど、もっと何かを私にくれるようです。

「たった1円だけれど、もっと何かを私にくれるようです」という表現が印象に残ります。もっと何かというものは一体何でしょう。私が思うことは、一緒に無駄話をしながら内職をし、それを通じて親が自分をどれほど大事にしてくれているかを噛みしめる、だから楽しい家庭が築ける。そういう実感ではないでしょうか。親が自分をとても大事にしてくるれるということは、実は普段、子どもはあまり意識していません。観念で分かっているのですが実感としてはあまり分かっていない。ある学校の先生が生徒を前にこう言いました。「お前さんたちのお父さんお母さんの前に魔法使いが現れて、自由に子どもを産みなおす能力を与えてくれたら、果たしてもう一回君自身を産んでくれると思うか、どうだ」と聞きました。誰も手を挙げなかったそうです。これは考えてみれば自然なことなのです。自分自身の全てが好きだと思っている子どもはあまりいません。自分には必ずどこか嫌なところがあると思っている子どもが殆どです。そのような自分をきつと親も嫌だと思っただろうと考えてしまう。しかし手伝いを通して、親が自分を大事にしてくれていることを実感する、子どもは、その暖かい気持ちから一生懸命伸びるようになります。

手伝いをさせるもう一つの効果は、お母さんが10個つくるうちに自分は1個しかできないという限界を感じさせると同時に、やがて大人になればお母さんと同じようにできるだろうなど、将来に対する希望をもたせることができることです。それも「もっと何かを私にくれるようです」という、もっと何かの中身だろうと思います。

6. 子どもの気持ちを受入れることの大切さ

教育の基本は愛情です。しかし現実には、愛情をもって接しようとしても、些細なことで双方ともつい頭にきてしまい、簡単そうでなかなかうまくできないものです。どうしたらよいのでしょうか。ある新聞への投書をご紹介します。

「長女が赤ちゃんのとき銭湯によく行っていた。3、4歳くらいの女の子がぐずついたのでその子のお母さんが注意をしたことに端を発して親子げんかになった。両方の声がどんどん激しさを増し、体中から湯気が立ちのぼっていた。そのとき私はそのような母親にはなりたくないものだと思っていた。ところが最近の小学校6年の長女と私の関係はまさに11年前に見たあの光景とそっくり。長女の食ってかかってくる言葉づかいにまず私がまいってしまう。なぜ普通に話せないの？というところから始まる。そしてあとで空しさが残る。あんなにかわいくてたまらなかったのにだんだん憎たらしくなる。寝顔を見てはこんなはずではなかった、とため息とともに、どうしてだろうと涙することもたびたび。先日長女が、私は自分でも何を言っているのかわからなくなってくるんよ。悪いとは思うけどお母さんにめっちゃめっちゃ言ったらなぜか頭の中がすっきりしてくる、といった言葉に私はハッとされた。長女は今生意気な口を聞いてみたいときなのだ。高学年になりいろいろ責任あるところにも立つ、友だちも人それぞれ個性があり付き合うのにも疲れるといふ。小さな胸に考えることは盛りだくさん。心が揺れ動いて当たり前。そういう成長段階なのだというごく単純なことが分かっていなくて、反抗的な現象面だけを見ていた。長女のあるがままの姿を受け入れることによって彼女は嘘のように変わってきたよ。

皆様の中に学校の先生の経験者がいらっしゃると思いますが、この方はもうお気づきだと思います。これは教育愛をもつためのコツです。何かというと、反抗してくる顔つきとか、言葉づかいとか、そういう姿形を見ていると、親子だって感情が波立つ、そして感情が押さえきれなくなる。ところが形ではなく心の中を見ると「そうだ、いろいろと悩みの多い時だ」とそういう気持ちになる。そうすると、とたんに「自分と同じではないか」ということに気づきます。思うことが思うようにいなくてイライラする、当たり前だと共感します。こちらの気持ちの持ち方によって関係が変わってくるわけです。つまり親子でも気持ちが波立ってきたときは、心を理解するようにしていくことで、子どもを受け入れることができる。受け入れたら、受け入れてくれる人の言うことはなんでも聞くようになります。そういうコツを覚えておいてください。

きっと役に立つと思います。

ここまで申し上げてきたことを、多くの家庭が理解してくれるようになれば、金銭教育の大切さとか、子どもを心で受け入れることの大切さとかが世の中の常識として広がっていくことでしょう。手を抜く学校も無くなる筈です。

7. 金銭教育による社会の活力の維持・向上

もうひとつ大切なことは、金銭教育によって子どもたちをよくしていくことと並行して、社会全体も改善していかなければならないということです。このあいだのアメリカのテロ事件で日本の経済も大きく影響を受けつつあります。株が暴落するとか、石油が値上がりするなど様々な影響が出てきます。株には関係ないという人でも、石油が上がると物価面で影響を受けてきます。ですから金融システムがうまく動いてわが国の経済が活力を保ちつづけるようにしないと、国全体が貧乏になります。個人だけがいくらしっかりしていても社会全体の機能は向上しません。また、悪徳商法の横行も社会を悪化させるという点で注意が必要です。最近は手口がより巧妙になり、商品のみならずサービスの面でも深刻な被害が出ています。

社会全体が良い状態を保ってこそ、金銭教育はより生きるものであることを申し上げて終わりにいたします。